

春燈

9
月号

SEPTEMBER 2007



安住 敦の句

夕牡丹 「今生我身二つ無し」

句集『午前午後』昭和四十七年

「五月六日、久保田先生の祥月命日なり。本郷喜福寺に修忌。たまたま経文の中にこの語あり、帰り来りて心に残る」の長い前書きがある。先生には百四十六の牡丹の句があるが、初出は前年の昭和四十一年で、掲出句は三作目。曹洞宗の経文『修證義』第一章総序の中に「當に知るべし今生の我身二つ無し、三つ無し」とある。久保田先生五年忌のこの年、安住先生は還暦を迎えられた。

木村傘休

安住 敦の句

清明や伊勢太神楽磯伝ひ

『柿の木坂雑唱以後』昭和五十九年

名勝二見ノ浦の賓日館は、その頃まで貴賓の宿舍として知られていた。安住先生をお迎えした東海大会は、開会に先立ち伊勢太神楽を見て頂いた。演じたのは伊藤森太夫社中で、白砂青松を〈磯伝ひ〉に神楽舞の曲ものびやかに登場したのである。〈清明や〉と置かれ、恰も絵巻物を見る趣がある。〈梅の門伊勢太神楽招じけり〉や〈墓出でて太神楽いま佳境なり〉なども作られている。

池園 二三江

西ヶ原日記

(34)

鈴木榮子

山法師三島文学館への径

三島由紀夫文字豁达や新樹光

梅雨どきの晴間晴間を用足しす

梅雨湿り女の髪のみだるるよ

夏百日旅どき仕事捗りどき

初出荷西瓜は甘度計らるる

夏盛ん一眼レフを自祝とし（八月二十二日）

三伏や上眼遣ひに犬伏せて

涼しとは文字さへ涼し令夫人

万年筆の魔法能筆乞巧奠

祇園祭ちまき山車より飛んで来し

父母を迎ふる鉄扉芋殻焚く

浅草

生田高子

これやこの中村座跡梅雨の蝶
対岸は父のふるさと川涼み
功德日の大川上る納涼舟
千成酸漿しほね鹿骨ぼね育ち誇りけり
金板に置く下足札どぜう鍋
入れ込みのせはしく啜るどぜう汁
夏萩を育てて路地の月日かな
土用鰻出自を問はれみたりけり
水無月の大門でバス降りにけり
菩提寺を出て草市に紛れけり

酒の相手

森下賢一

亀よりはよく鳴く隣の座敷犬
月給もなくまくなぎも寄りつかず
亀飼つて深川住まひ杉風忌
尺取を肩より移す枝探す
酒飲めば蠅来てなつく漁師宿
いたづらがしたさうな目の烏の子
優曇華が咲く気に入らぬ絵の額に
猫死なせ猫の名つけて金魚飼ふ
立ち飲みの気安さ羽蟻吹き飛ばし
無類なり酒の相手のかなぶんは

当月集

鈴木 榮子選



○ 横田初美

転寝の手より逃れし団扇かな

卓整へ人待つばかり月見草

沙羅落花一日のけじめ潔し

刑部岬は夕日の丘よ風薫る

河童忌や若きに応ふ九十九里

○ 徳永辰雄

わすれめや梅雨にむせびし敦の忌

夏富士や眉目秀麗いや高き

伊豆国一宮神事に浴す御祓かな

曲ること知らぬ若竹世に挑む

炎天下ど根性もて少年兵（戦友会）

○ 向井芳子

平坦な道につまづく羽抜鳥

陰干しの十薬匂ふ御師の家

初浴衣背なの丸きを云はれけり

茅の輪くぐりて喧嘩納める二人かな

綿菓子のもこもこ殖ゆる梅雨晴間

○ 佐々木新

葛城は古事記の地なり戸立蜘蛛

葛城の修験の谿や青時雨

谷の風躲して白し夏の蝶

雲映す扇棚田や時鳥

父の日の形見の時計腕にかな

春燈の句

鈴木 榮子選

夏館頼朝書状花押印

暑に抗す螺鈿飾りの太刀の鞘

夏灯し紺糸緘後北条

溽暑なほ筆の進まぬ千字文

湖となる富士の滴りありにけり

六月の風の明けゆく湖の色

山法師通りに風のおふれけり

寝に入れば蛩となりし老いの母

老鶯や手摘の香る五葉松

もう一度我に啼きくれほととぎす

緑陰の蜂鳥瑠璃を零しけり

落葉松の気根を撫づる盛夏かな

朝曇右脳強化のストレッチ

郭公の朝の一声届きしよ

神奈川 松波とよ子

東京 今井 弘雄

東京 清水 美子

兵庫 伊藤 百江

軽やかな水音に育ち花わさび

夕顔や隠れ家めいて路地の奥

糟糠の妻の手匂ふ胡瓜漬

水中花うなづく事もままならず

老樹との絆結びし蜘蛛の糸

向日葵や背丈をきそふ兄おとと

朝焼けの富士への思ひ叶ひけり

梅雨払ふ蘇峰の富士の一筆書き

憂国の三島の杜のほととぎす

山中湖へ発声練習のはたたがみ

夏座敷抜けしお軽の酔ひざまし

越路吹雪の小唄よかりし浴衣掛け

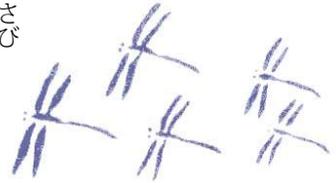
日焼けしてむかしは塾へ通はざり

化粧して昼顔夜の顔持たず

広島 水成 玲子

東京 宮田 豊子

神奈川 石田 康明



余言

鈴木 榮子

葛城は古事記の地なり戸立蜘蛛

佐々木 新

古事記が日本最古の歴史書であることは小学校で先ず習った。「稗田阿礼」「太安万侶」の名は覚えている。

葛城にはへ葛城の山懐に寝釈迦かな 阿波野青畝の有名な句がある。奈良の葛城山を有難く髣髴とさせる。

戸立蜘蛛はトタテグモ科とその他地中のクモの総称で、体長は10ミリから15ミリとのこと。色々な蜘蛛が居るものだ。戸立蜘蛛というからは何か困ったり蓋をするのかと思つたら、やはり蜘蛛の糸で蓋を作つてすむという。

蜘蛛というと嫌われもののようにだが蜘蛛には蜘蛛の一生がある。日本の諺に「朝の蜘蛛は殺すな、夜の蜘蛛は親とみても殺せ」というのがある。夜は不吉な感じがするからか。用心なのだろう。

転寝の手より逃れし団扇かな

横田 初美

転た寝は古今和歌集にもあり「―に恋しき人を見てしより―」と。ころびね。かりね。と粹なことのようであるがあまり経験はない。仕事をしていて眠くなりガクンとすることはあるが、万一転た寝でもしようものなら夕方まで寝てしまいそうで出来ない。まして団扇なんか持たない。

でもこれはこれでよい。房州の宿にいつていた夏休みならあつたかも知れない。色々な一日があつてよい。

夏場所や韃鞮の馬蹄地響きす

呉 文宗

今日も名古屋場所の最中であるが、力士が力士と一対一で闘うのは大変声援の甲斐のあるものである。力士というのは生来粹な職業で両国技館には芸者さんが栈敷に並んだものだった。今でも部屋及び相撲茶屋あたりで多少の手配はしていると思う。テレビで一覧するとそれも少なくなつたようだ。作者も台北の呉さんだが―韃鞮の馬蹄地響きす―は言い得て妙の幹旋である。韃鞮はモンゴル民族全体の呼称。日本人より日本人らしい横綱が誕生している。あの顔を見てると勝たせたくなるのは特殊な人気というものである。

夕星を鳴いて呼び出す青葉木菟

葦原 葭切

夕星は宵の明星で夕方に西方に見える金星である。

〈宵の明星、金星のともった夜が透明で歩いた夜の明け易く〉等という下手な恋文を書いた思い出がある。

いまでも金星を一番先にみつけると、昔の思いはないが若かったころを思い出す。夕星が青葉木菟を呼び出すなんてよい詩語である。

(以下略)